

中国の改革に生きる東亜同文会の遺産

霞山会理事 江頭数馬

今日は、東亜同文書院記念センターの講師としてお招き頂いて、私なりの考えを述べて頂くことは、大変光栄に存じている次第であります。愛知大学は東亜同文書院大学の伝統を継承した由緒ある大学であることは私どもも重々承知しておりますし、この記念センター展示室が成立

しまして、ついこの間ですが、私も参って内部を色々見学させて頂いたわけです。私は、一貫して中国とつきあってきて、新聞記者時代もずっと中国関係の方をやっておりました。またそういうことから実は愛知大学には度々寄せて頂いたし、図書館にある同文書院関係の資料も色々参考にさせて頂いたという御縁があります。

私を手掛けておりました『東亜同文会史論考』という本ができ上がりました。これは、三六一頁からなり、六月一日刊行されました。今年にはちょうど霞山会創立五〇周年になりますので、その記念出版となるものであります。霞山会

というのはご承知の様に東亜同文会を継承した財団法人ですが、場所はかつて東亜同文会がありました虎ノ門の、文部省のそばにあります。この愛知大学が同文書院を継承したということで、霞山会とも深い関係にございます。

この『東亜同文会史』について、私がこういう本を作ろうということをおもいましたのは、やはり霞山会の拠って立つアイデンティティと言いますか、その精神というものは何であろうか、またそういうものを振り返ってみなければ本当の意味での将来の展望もえがけないという様なことでした。更に東亜同文会というのは中国とは大変長い歴史的關係を持ちまして、日本の対中国政策を牛耳ってきた、といえばちょっと語弊がございますけれども、大きな影響を与えてきたという様なことがありますので、この本を作ることによって私なりに中国との関係をもう一回みつめ直そうと思ったのであります。それで資料を集め解読するだ

けて長い時間がかかりまして、ようやく出来上がったということですが。

『東亜同文会史』というのは実はこの本を出す前に1冊でております。膨大な資料を盛りこんだものです。ところがこの本は残念ながら大正期で大体終わっておりまして、昭和期についてあまり触れていないという難点がございます。そして、東亜同文会ないしは東亜同文書院を語る際、草創期、日清戦争後、辛亥革命の時代ころまでは多くの研究者が出ています。ちょうど、中国が日本にならって国を近代化しようとした、そして沢山の中国の若者が日本に学ぶことになった、これを日本も真剣になって助けようとしたということで大変親しい間柄になりました、そういうことをリードした東亜同文会の意義を評価するということが大変流行の様になったわけです。おそらく皆さん方が東亜同文会、東亜同文書院について色々読まれたり、あるいはお聞きになったことはその時代のことが多いのではないかと思うわけです。

ところが日中関係はご承知の様にもう一九二〇年代になりますとたいへん反日気運が高まるし、そして満洲事変、盧溝橋事変を経て日本の大陸侵略、これが大々的に展開されていく、日本は満洲国をつくり、汪兆銘政権をつくって中国を全面的に支配しようとした。その時代にも東亜同文会、東亜同文書院はやはり大きな影響力を持っていた、これは事実でございます。どうもその辺になると直視したくない、何となく目をそらしたくなる。最近の様に戦争責任

問題が再燃しますと尚更そういう傾向が強くなるわけですが、私はやはりそれではいけないというふうな感じを持っていたわけです。そして、そういう日中関係の悪夢ともいべき時代がすべてマイナスだけであったのか、その間にもプラスになる様な状況もあったのではないか、それをトータルに見なければならぬ。そうすれば歴史的事実をもう一回掘り起こして、その中からそのへんの歴史の光と影をちゃんと見極めていくという作業が必要であろうと、こういうふうにご考えたわけです。そういうことでこれも日本側だけではだめだ、やはり中国の学者にも話ののって頂いて、いろいろな意見を交換する中でそういう作業をやらうじゃないかと、こういうことを思い立ちました。

この「東亜同文会史論考」の部分だけ申し上げますと、第一部が「昭和期の東亜同文会の活動」であります。その時の主役になる人は近衛文麿会長、「蒋介石相手にせず」という様な政策をとったために、この日中戦争を拡大して日本を悲劇におとしいれたということで大変評判が悪いんですが、この会長のリードのもとに東亜同文会が対中国関係に影響をもったということはまさしく厳然たる事実でございます。そして、その時代の東亜同文会の活動はどうあったかという様な点について検証したわけでありまして。そして近衛文麿会長に先立って、あまり論じられなかったんですけれども、牧野伸顕という方が会長をやった時代が昭和初期の十年ぐらい続いております。牧野さんというのは明治の元勳大久保利通の次男でして、中学時代アメリカで学び、外交的経験も豊かだし、内政についても大臣をやって、特

に宮中勢力では指導的立場にあった人です。こういった人々が会長であって、この時代の東亜同文会を指導してきたという問題を扱いました。

それから第二部「東亜同文会史をめぐる諸問題」でございしますが、これについては近衛内閣がどうして日中戦争拡大への道を歩まざるを得なかったかという様な問題、それから東亜同文書院の大旅行というのがございます。東亜同文会でも調査出版関係をやった大変な事業がございますが、これを指導した根岸祐という東京商科大学の教授だった人ですが、その人の業績を扱いました。それから東亜同文書院には中国の学生が入学しまして、これは中華学生部に学んだわけですが、こういった人たちについては従来あまり研究がなかった。これについても研究論文を寄せてもらったわけです。それから今度は中国側では復旦大学、上海師範大学の先生達にも中国サイドから見ても、この同文会、同文書院はどういうふうに見られるのか、こういった点について研究し論文等を寄せて頂いてこれを掲載したわけです。同文会、同文書院が、従来スパイ学校だとか、あるいは結果として戦争に協力して侵略のお先棒をかついだということを言われておりますけれど、果たしてそういう既成概念が客観性を持っていたのかどうかというようなこと、それからもう少し広く日中関係、つまり中国で大学を営み、沢山の学生を輩出し、かつ調査旅行をやったわけですので、それらの研究成果といったものが今日からしてはどういう意味があるのかといったことについて、それなりの評価を与えたわけです。

第三部は「資料編」として近衛文麿の論文、牧野伸顕の語録といったもの、それから昭和初期の同文会の事業報告、さらに同文書院は交通大学を実は借り受けたわけですが、その間の経緯についての外務省の文書などを入れました。これは私がこの研究をやって得た一つの成果というべきものです。この愛知大学の学長になられた本間喜一先生が上海で終戦をむかえた時に、東亜同文書院を中国側に引き渡したわけです。その時の資産関係についての目録、資産接收書といいますが、こういったものが手に入ったのでこれを収録したものです。

同文会会長であった近衛文麿、公爵であったわけですから近衛文麿公は「蒋介石相手にせず」ということで、戦争責任があつてだいたい評判が悪いわけです。しかし、父篤磨―東亜同文会の創始者であつた―の意志を継いで、中国との交流には並々ならぬ努力をしてまいりました。ご承知の様に、日中戦争開始後も、和平交渉が間断なく続けられます。これについては、いろいろな本が出ておりますので内容はそちらに譲るとしまして、近衛文麿公は和平工作に対しても並々ならぬ関心を抱いていたことがわかります。近衛さんの対中国アプローチは基本的にどのような考え方にたつていたのかということについて二、三文献を見ますと、第一次大戦後の民族独立を支持し、欧米中心の秩序にもとづいた貿易上の覇権を打ち破って、自由貿易の時代をつくれということが主眼になっております。しかし、満洲については日本が血を流して獲得したものであるから、たやすく渡せないといった立場ではなかったかと思うわけです。

それ自体をとればまた帝国主義的な侵略政策を表しているように見えますが、その当時の情勢からみれば、懸命に国益を守りながら中国に一方的に侵略したわけではない、ただ問題は軍に引張られて結局は軍を押しえることができなかったのではないかと思われるのです。そこでこの辺を前任会長の牧野伸顕の考え方を含めて、東亜同文会の指導者の方針、理念といった様なことを見てみますとはっきりします。牧野は同文会長となるのが大正の末年でありますが、その時に同文会の業務を政治と切り離して、教育文化交流に重点をおくべしと主張しまして、同文会においてこれが承認されたわけです。

結局はそうなりまして同文会の事業は同文書院の経営が中心となるわけですが、天津に中日学院というのがございまして、この経営にも相当力を費やしていた。牧野は二二六事件の時、“君側の奸”として若手の将校らから、命をねらわれた。ちょうど湯河原においてその襲撃から逃れることができて一命を救われたわけでございます。当時内務大臣で天皇に最も近かったわけですが、牧野の娘婿が吉田茂つまり戦後の現実派の政治家として安保条約を結んで大変評判は悪いのですが、今日になってみれば日本の戦後の国際的ステイタスを確立する上でやはり大変功績があった政治家だと思えます。牧野が会長時代に奉天の総領事をやったり、済南の総領事をやったりしているのです。吉田の外交官時代の経歴をたどってみると、二十代の終わりに外務省に入りますが、必ずしも外交官としてエリートではないのであります。しかし、当時から鋭敏な感覚をもって中国

を見ていて、当時の奉天や済南が非常に中国情勢の中で鋭敏な紛争点になっており、この情勢報告を牧野に送っていたと思われます。牧野はまたこの辺をよく読んで、事態を判断、中国政策に軽率であってはならないと思っていたと思われます。

牧野のこの考え方は、北一輝が上海で中国革命にコミットするような発言をしていて、いろいろ日本の外交にも大変迷惑がられるような言動があったのですが、現地からの報告に基づいて北を強制的に帰国させる措置をとっているようなエピソードにもあらわれている様に思われます。牧野の当時の考え方を表したものの「戦後回顧録」が出ておりますが、中国との関係では、パリ講和会議で決められた国際的枠組みがあつて、その中で領土保全を漸進的に実現させていくようなステップを彼は考えていたのですが、しかしご承知の様に、二十年代に入りますと中国ではコミンテルン（第三共産主義インター）の影響が強くなりまして孫文も国共合作路線にはしるわけでございます。五四運動で排日・排日貨運動がおこり、ナショナリズムが強くなる、それによって中国でも新たな動乱が起こる、これについても牧野はそれにデイスターブされて弱つたという様なことを言っている。これは東アジア国際関係史の課題でもあるのですが、最近孫文が死ぬ数年前のような考え方に立っていたのかといったことが研究会上で問題になっていきます。

孫文は『実業計画』の中で、外資導入に対してかなり柔軟な考え方を持っている。満洲にも外資を入れて開発するぐらいのことを考えていた。しかし段々左傾化する、民族

主義さらにはコミニズムの影響を受けるといった方向に変わっていったというようなことが論じられているわけです。この様になりますと牧野の持っていた対中アプローチの姿勢は必ずしも過度の日本帝国擁護論ではなかったのではないか。私は牧野の考えは近衛にも通じており、大体これが同文会、同文書院の中国との付き合い、付き合いという以上に上海に拠点をおいて調査研究をやったのでありますが、そういうものに反映していたのではないかと考えております。

同文書院は大正末年、上海の徐家匯の虹橋路、旧上海市の西側になりますが、ここに敷地、建物がありました。これはかなりの広さのものでして、すぐ近くに南洋公学、後に交通大学となりましたが、それに隣接して復旦大学がございます。当時の大学というのは、それほど制度としても整備されていたものではない。レンガ造りの建物をつつ持つていたぐらいのものではなかったか、それに比べて同文書院は大変立派な建物がそびえていたのではなかったかと思えます。

往々にして同文書院、同文会の創立基金が義和団事件、一八九九年の頃にできましたので、その義和団事件の賠償金がもとではないかという人々がいます。主に中国側でそうだと断定的に論じた様な文章を見かけるのであります。実際は同文会そのものが、近衛家の寄付がありましたし、外務省も補助をしておりましたし、これらが基金の元になつておりまして、虹橋路の同文書院の校舎を創るときには根津院長が資金集めもしております。義和団の賠償金で

できたのではないことは、はっきりしております。もっとも、団匪賠償金というものは相当膨大な額にのぼりまして、これが日本外務省対華文化事業部のファン্ডになります。そしていろいろな文化事業団に配布されまして、やがて同文会、同文書院にもこの金が出る様になります。

私が外務省の資料でざっと見ましたところ、同文書院あるいは同文会の費用の三〇％程度は団匪賠償金を基金として、対華文化事業部から支出されたのではないかと推定されるわけです。しかし、この対華文化事業部からの金は中国人の教育に使う、中国との文化交流に使うという主旨になっております。というのはアメリカがこの賠償金を大変有効的に使っております、例のロックフェラー病院（協和病院）、北京にあります。とか清華大学とかの運営をいたしますとか大変評判がよかった。日本も何とかしなければと広く調査をしてその結果、やはりこの金は中国に還元すべきだということで大体コンセンサスができて、その結果できたのが天津中日学院であります。実は漢口にも同じ学院がありました。

それともう一つは同文書院の中華学生部であります。同文書院の中華学生部は毎年五〇名ぐらい各省から推薦された学生を選考して、日本語を予備段階として学習させ、のち本科生としていれるという構想で始まっています。中日学院の方ですが、これは日本の旧制中学にあたるもので、中国人で小学校を卒業した者の中から、それぞれ省の試験を通つた人を入れて、日本語を相当学ばせて日本の大学に入れるという構想のもとにできた学校です。この学校に日

本の旧制商業学校で学んだ学生を5、10人ずつおくる様になっており、中日学院はこの様に中国人学生の養成の学校となつていたので、このもとは東亜同文書院が創立された一九世紀末二〇世紀初頭、東京の目白に近衛篤磨公の邸宅のそばに東京同文書院というものがありまして、ここで中国人の子弟を入れて日本語の予備教育をやり、日本の大学に進学させたものにさかのぼります。これは一九二〇年ころまで続いておりまして、その卒業生も多いのであります。

例えば中国の要人で、ご承知だとも思いますが費孝通という有名な社会学者がおられますが、この方のお父さんも東京同文書院で学んだんだというようなことを言っておられました。国民党元老の鄒魯もそうです。

いろいろ話しておりますと、案外東京同文書院に学んだんだというような中国人もおりまして、当時は日露戦争前後は一人くらい中国人が日本に留学しておりました。

中日学院はこの流れをくんでいまして、この例を見ましても、同文書院についてよく言われるのは、日本の学生を中心に上海で教育をして、しかも市場調査なんかをやったから、はじめから中国市場を制覇する、ましてや軍隊が大量に進出したからその先兵としたんだという、はじめから帝國主義意図をもってつくられた大学だというような評価があるのですが、これは間違っています。このスタート時点からみて、やはり日中間の人材育成と交流を念願していたのだということがはっきりいたします。

中華学生部についていいますと、エピソードはいろいろ

ございます。この中華学生部に入った中国人学生から中国共産党に入党して、当時上海大学というのがございますが、これは中国共産党が作った大学で、上海の虹口の閘北というところがありますが、ここが上海の共産党の拠点だったのです。中華学生部の梅電龍という学生は正しく五三〇運動の立役者で、学生運動のリーダーとして活躍し、その影響のもとで後に同文書院共産党の闘士となる中西功、安斉庫治といった人たちがでてくるし、またスノー、ゾルゲ、尾崎秀実などこの辺に関係してくるというわけです。中華学生部が当初考えた構想とはかなり違ってきて、中国共産党の拠点という言い過ぎですが、かなり活動面での隠れ家になったのではなからうかと思われまます。この点は今後の研究課題となる様に思います。

梅電龍は東京に渡ったところで捕まり、二年余獄にいたのち清水董三の保証で釈放されます。昭和六年のことで、彼は梅翼彬の名前で第三党（社民党系）に加わり、人民共和国では政協会議のメンバーになります。五五年に失脚、八〇年代に名誉回復しました。中華学生部出身者は銀行家や学者が多く、共産党の活動家にはなっていないですね。

同文書院の建物は虹橋路にありまして、周囲を威圧するほどの豪壮なものであったわけですが、しかし盧溝橋事変に続いて上海事変になるわけですが、しかし盧溝橋事変に続いて上海事変になるわけですが、戦火はすぐ郊外に及びます。その時、中国兵が建物を焼いているのです。当時の建物の図面はございませんで、その頃の同文書院の略図が同窓会のグラフにのっているのがありましたが、宿舍なり教室なりいろいろあり、立派なものだった様であります。

これは焼かれて、この校門の前に物産館というのがあり、これは大旅行で集めてきたいろいろな物産類をここに展示して、場合によっては学生に実際の商取引などを教えたところだと想像されるわけですが、何十年間の蒐集の成果を取っていたのではないかと思われまます。これらは全部焼かれています。

その後、学生教育を続けるために、交通大学を借りうけるという稟議が出ております。当時フランス租界の中に入っていたかどうか、当時の卒業生に聞きますと、紅橋路一带はエキステンションというようなステイタスだったらしく、治外法権が及んでいかどうか判りませんが、中国政府の管轄が及ばなかった様な場所にも思えるわけです。

その時難民1万人が狭い交通大学内に逃げ込んできたのですから、大変な荒れ様であった。まず彼らを退去させる必要があり、そのために救世軍に三、〇〇〇円（当時は法幣と日本円はほぼ同じ）を渡しております。建物も相当壊れていたし、寮や職員住宅を作る、図書館はありましたが、交通大学は鉄道関係の理工系大学であり、図書は文化系のものがあったわけではない、これらを修復するために一〇何万円支出しているわけです。このお金の出所は外務省です。近衛会長が当時の広田外務大臣に申請書を出して、すぐに許可されております。その細目は全部ごさいます。どういう様にお金を使つて、どういう様に交通大学を修復したかという点は細目があり、これを見ればすぐわかるのです。当時の一七万円近いお金ですが、今日から見れば莫

大なものであります。当時私の子供の頃は、かけうどんが一杯一〇銭、これを親にねだつて叱られたことがあります。かけうどん一杯今なら何百円はするので、その何千倍、一七万円の何千倍ですから、何億、何十億にもなるものと思われるのです。今これらを見ながら思い出すのは、日中戦争時の南京虐殺事件で、一般市民を殺害したという暗い話ですが、交通大学を借りうけて、難民を無事に引き取らせるためにそれだけのお金を出しているわけで、近衛さんが会長で一所懸命やったというところを見ますと、大学を大切にしながら今後も現地調査をやるうという姿勢の表れではないかというふうに思つた次第です。その様なことが終戦の時に交わした文書によつても、裏付けられているわけです。

終戦の一九四五年八月十五日にいらしたのが、この大学を創設された本間喜一先生です。本間先生が上海にとどまつて、日本の敗戦とともに南京政府から接収委員が派遣されてやつてまいりました。そこでの接収文書の作成にとりかかりまして、接収ファイルの目録、その内容がみつかりました。全文を本書に掲載しております。この文件から同文書院の土地は、日本側の支出で買っています。中国の土地の制度はとても複雑でありまして、この土地売買契約書を見ても理解できないのでありますが、必ずしも大きな土地を一つ、ほんど持っているのではなくて、いろいろな所と契約をやりながら買つていったんだなあとということが分かるわけです。本間先生はこの土地を終戦前に少しずつ売つ

ているのであります。この辺からすでに日本の敗戦ということが早く分かっていて処理策をとられたなあと判るわけです。この支払代金がいろいろあるのですが、金の延棒でもらったとかあるわけですが、これを読んでいくと状況を知る上でおもしろいことが分かるのではないかと思つたのです。当時は不動産会社がありまして、この会社から買つてもらっている、未徴収金もかなりある。この文書に署名された、本学の監査役でいらつしやつた木田先生におたずねしたことがあるのですが、そのお金で教職員やどんどん婦校してくる学生達の生活費を賄つたんだということでした。ご承知のところですが、本間先生、鈴木擇郎先生が学籍簿をトランクに何とかいれて持ち帰つてここ（愛大）で保管していただいた、その学籍簿をもとに文部省と交渉して、旧制の大学として再開・創設ということが可能になつたのであると私は聞いております。

五〇年間かかつて調査研究をやりまして、その調査研究の成果はこの愛知大学の図書館に所蔵されております。これと同じ様なものは交通大学図書館にも残っていません。大旅行の調査研究報告書は、これは学生が書いたものですので、荒削りの卒論といったものと考えていいわけですが、同文書院には支那研究部というものがありませんし、同文会には調査研究部がありました。ここの研究を指導したのが根岸信先生です。根岸先生は後に『支那ギルドの研究』というので有名ですが、これで学士院賞をおとりになる、アカデミックな意味でも高く評価された方です。先生がいろいろ指導された先生達は東大、一橋大、高等商業の

学部長、学長になられたその道の權威でして、学生のエネルギーッシュな調査旅行もさることながら、その後の研究、その様な材料をもとにした調査分析は大変価値の高いものであると私は考えているわけです。ただ現地の調査報告に基づいたものであるので、十分に分析されたものではないというようなことがありました。何といつても戦後の情勢が、というのは中国の情勢が国共内戦後、共産党が人民中国を成立させて、大勢ががらつと変わるわけです。その過程でこの様な調査研究報告についても世間に出せないといった様な風潮が長く続いてきたと思います。もう一つは、中国ではご承知の様に民族解放闘争路線、そのもとになつたレーニンの『帝國主義論』ですか、こういった見方になつた分析をしているのが優勢になります。この様な考え方が修正されるのは鄧小平の出現、改革開放の浸透以後です。この様な戦後の大きな流れの中では同文書院の、同文会の調査報告書も日陰の様な存在とならざるを得なかつたと思うわけです。

中国共産党の線とはつながっていません。うでもない。中西功さん、安斎庫治さんとか戦後共産黨員となつて活躍した人もあるし、そのもとをたゞれば王学文、梅電龍になるわけです。張香山さん、閣僚級の大物でございますが、中共対外連絡部、現中国国際交流協会副会長、この人も中日学院の出身で、以前は中日学院出身という身分を隠していたのですが、昨年あたりおおっぴらに言つてきております。ということで蔭の部分では中国共産党ともつながっていた。

そういう調査報告資料、これは愛知大学に所蔵されているので大変貴重なものであることは確かですが、やはり上海にも残されたものが相当あると私は推定しております。それで復旦大学の黄美真教授を通じて、多少あたってもらいました。それから上海社会科学学院にいた史惠康という、これは同文書院の出身者で上海社会科学学院の教授となつた方で、今八十数歳になるのですが、おりまして、その方を通じてもちよつと聞いてみたところ、やはり当時の資料が梱包されたまま、どうも放置されているという話をしておりました。中国の資料について研究したり、あるいはそれにあたらうとされた方にはお分かりかと思うんですが、中国の档案というのは、これは一つの歴史文献だけでなく、政治資料なのであります。だから、それにタッチすること、それを開くことによつておこる危険性を彼らは常に考えるわけで、我々が図書館に行つて、書庫に入つて見るというわけにいかないのであります。相当な手続きと、手続き以上に人的関係なども作つてアプローチしていく必要があるのではないかと思つているわけです。そういうつたことで、私はここに愛知大学のセンターができたということは、将来そういう部門につながりをつける様な一つの足場ができた、あまり言うと先生方に負担をかけるのでこれ以上は申し上げませんが、そういうつたことも考えられる様な足場ではなからうかと思つたわけです。

と申しますのは、同文書院は姿を消しましたけれども、その他に、上海にはたくさんさんのミッション系の学校があつたわけです。例えば、セントジョーンズ大学というのは大

変有名で、それから東呉大学というのは上海にございました。また同済大学はドイツ系なんですが、北京にはご承知の様に清華大学などがありました。こういった大学は、だいたひ五二年前まで継承されていまして、それぞれの学校が、今度は中国の大学に吸収されるといふ形で消滅していったわけです。例えばセントジョーンズ大学は華東政法学院になっております。黄美真教授は当時の学籍簿とか図書、それからそういう教学関係の資料はだいたひそこに保管されているという様なことを言っている。だから、いろいろな研究ができるんだと。ただ同文書院、同文会については、中国で結局は梱包されて放置されているので、資料が使えるのは愛知大学のだけだということ、やはりなんとかしななきゃならんと、そういうことを言つておりました。物産館の資料があつた時焼失したということは、大変残念だということをおりました。

ミッション系学校と日本の学校のどちらが教育権回復運動で敵対すべきかというか、あるいはやつつけねばならぬ相手であつたかという様なふう論ずる場合もありました。

上海師範大学から来た単冠初研究員の研究によれば、両者のあつかいには相当な違いがあつたということです。同文書院の創設にあつて、やはり近衛公と、それから中国の実力者であつた張之洞と劉坤一とが合意ができて、しかも大学設立にあつては、地方の有力者全部が書をよせているわけでございます。だから、それが一つの公認された証明だと、こういうふうに言つておりました。ミッションスクールに対してはナショナリズムもこういつた時には、同

文書院以上に攻撃の対象になっている。そういった点から見て、同文書院というのは中国ではやはり優遇されてきたんだと、こういう様なことを言っております。そういうことなので、強固とは言えないものの、足場としては堅いものを持っていたと思っております次第です。

同文会、同文書院の残した大旅行、調査研究、それは支那省別全誌という形で出ておりますし、さらに同文会では民・商法、それから公司関係資料、企業調査の報告類をたくさん作っております。こういうものが今日から見て、どういう価値があるかということです。社会主義計画経済体制になりますと、個別企業、市場での商品取り引き、それから金融機関といったものが非常に形骸化してきたことは、ご承知の通りです。その点、中国の大学のその方面の教科書を見ますと、みんなソ連の政治経済学教科書のコピーでありまして、それぞれ大学あるいは地方ごとに作られた本を買ってきて比較してみると、まるで同類の様なものばかりで、どうも実態がわからない。で、実態の方は実際に歩いてみて自分達で足で歩くしかなかったと、こういう様なことで来たろうと思うのです。実際、特に経済、商業、金融方面の学科、あるいは学院、これがどういうふうに変わってきたかという様なことを見れば、その辺の変動ぶりをうかがうことができるわけです。これについては、台湾政治大学の劉勝驥という人が、「問題と研究」の九八年五月号に、調査報告として出しておりますので、次に紹介させていただきます。

「一九五二年全国範圍の学部・学科調整によって、商学

部の名称は取り消され、各中枢都市には、財経学院が建設されて、各学科の商科教育を合併した。北京は、中国人民大学和中央財経学院を中心として、北京各校および華北地区の商学部を合併した。上海は上海財経学院を新設して、復旦大学商学部、浙江財経学院、滬江大学商学部、大同大学商学部、東興大学会計学科、セントジョーンズ大学経済学科、江南大学工業管理学科、上海学院会計専修科および企業管理専修科、立新会計専門学校、中華工商専門学校会計専修学校を合併した。」

こういう状態であったのです。要するに改革開放になるのが一九八〇年代に入ってからで、段々各大学で経済学院を拡大し分化させていく措置がとられていきます。いろいろな大学で商学院を開設いたします。それは、市場経済化に対応して学生を養成しなくてはならなかったからです。

私は時々北京大学へ行きますので様子をいろいろうかがうのですが、北京大学も経済学院の中に経済管理学部を成立させ、その後、台湾から資金を導入して北京大学光華管理學院というのが成立したわけです。三年前に参りました時には、一〇階建のビルを建てて学生をたくさん入れてやっていると聞いておりました。これは董事会制度をとっておりますので、その下には学院院长を置く、董事には台湾のファンデーシヨンの責任者、それから北京大学の責任者が任命される。学院院长にはよく知られております株式会社推進の近代経済学者の厲以寧という北京大学教授が任命されております。このうちにはたくさんのお学生を入れているとのこと、大学も市場経済に対応して変わってきているとい

うことです。

このところ私は大学で中国経済論を担当しております。中国のテキストにならってやっても仕方がないので、むしろ日本との比較論をやりながら中国で成立した会社法とか企業会計に関するいろいろな研究論文を書きました。

最近では不動産取引、証券取引、さらにこのところ金融危機が中国でも及びつつあって、元の価値を維持していることでクリントン大統領が大変ほめているという様な事がありますが、内情はどうか大変関心があります。実情から言えば中国はとても苦しいわけでありです。人民元を早く切り下げたいわけですが、切り下げればまた中国の経済自身に大混乱をおこす。日本とアジアにはねかえってくる可能性がありますので、そう簡単にやれないというところでは。中国の大学ではこうした動きに対応できる教育研究体制はありません。つまり市場経済に対応した学問の再開あるいは、研究の制度が非常に急がれたわけでありです。

ところが先ほど紹介しました様につぶしてしまっているのです。僅かこの五年、十年くらいのうちによく作っています。ここにおられる方々は中国の大学の要綱案内などご覧になられたと思います。立派に会計学科とか金融学科とか並べてあるのです。先生の名前を書いてありますけれども、ところが中身に入りますとさっぱり内容が無いという様な所が多いわけです。これは仕方ないことでありまして、早くその空白をうめなければならぬという状況でありまして、ここ五年くらいは、アメリカに留学して会計士事務所勉強したとか、あるいはスタンフォー

ド、プリンストンなどでその方面を研究した人達が帰ってきて、しかるべきポストにつきつつある。政府の要職につきつつあるといった様な状況がございますので、以前ほどではないと思います。

従って、この様な方面の調査研究ということになれば伝統的に言えば同文会、同文書院が一番重点を置いていた。特に昭和期、一九三〇年代南京政府が成立した時期に、そもそも南京政府は法制の整備をやるのです。ただし、すぐに日中間の紛争が激化しました金融上の戦争に巻き込まれますから、制度としては成立しない。しかし、法制は立派なものができた。その時に同文会・同文書院の先生たちが調査研究に当たるということでその資料が残っております。この様な状況からいって、今の中国の商品市場経済のニーズからいって、この様な資料の再調査、もう一回整理しながらつくり直す必要があります。そのうえで市場経済構築のために生かしていくことが大変必要なことではなからうかと思うわけです。

私は文化大革命の初期に北京特派員をやっております。その時は日中共産党の決裂があったのですが、それがようやく和解して北京へ特派員が戻った。両党の協定を見ますと、中国が「誤りを認めて真剣に総括する」という言葉で日共側も同意している様です。がその内容については多少あいまいさがある。私は北京におりまして当時の対立紛争の状況はいろいろと知っています。ようやく日中共産党との間の和解ができたことで一つの事件が結末したことでありますが、当時おこった大事件は文化大革命で

ありまして、この思想的根拠となったのが毛沢東思想であります。これを推進するために犠牲となったたくさんの方の知識人、新聞人がおります。

この中の新聞人の有名な「燕山夜話」というエッセイ集がございます。これを私が毎日新聞で紹介して、菊池寛賞授賞になったのですが、この「燕山夜話」の鄧拓のエッセイというのは中国の歴史文化の古典のもりこんだレベルが高いのであります。これを翻訳するため、あちこちに当たったのですが、結局は愛知大学に泣き込んできて、鈴木先生にお願いして、鈴木先生、清水董三先生、熊野先生などが全面的に協力してくれまして、後に一冊にまとめ、この様な本になったわけです。私にはこの「燕山夜話」は記念すべき出版物と思っておるわけですが、これは文化大革命の誤りを、毛沢東が人民闘争路線、大衆闘争路線へ暴走していった点を批判した、由緒ある、記念すべきものだと思っております。今回中共側が正式に謝罪したことでその思いを強くしています。

この翻訳出版に愛知大学の、伝統ある愛大の優れた、非常に伝統ある中国語学陣が参加されたということをおあらためて思いおこし、皆様には紹介したいと思つたわけです。ただし、実は後書きにもありますが、鈴木先生などのお名前はでてまいません。これは当時の愛大のイデオロギー的状况が複雑で中共批判など避けたいという動きがあったということを示しているわけでした、この辺、愛大の内になだかまりがあるとすれば、一つこの際水解して頂ければ幸いですと思つたわけです。

しかし、中国の内部は、まだ複雑です。確かに市場経済の時代ですけれども、共産党の支配が無くなったわけではない。まだ社会主義初級段階といった考え方もあるし、これが消えたわけではないのでありますから、今後、先ほど申しあげた三〇年代の市場経済に帰るかもしれない。けれどもそうはならない、もつと大きく言えばグローバル化の時代の国際市場の中で中国に新しい波が及んできているし、もつと攪拌的要素が強まるかもしれない。この様な時代であろうと私は思うわけです。

もうインターネットで通じれば上海の街の模様もすぐ出てきます。図書館の本、研究論文もわかる。そこまで見ることができるのであります。こういう時代の中国の変動、あるいは日本を巻き込む、逆に日本が巻き込まれるかもしれませんが、こういう時代の姿はどういうものであろうかと考えてみますと、歴史をもう一度、自分達の姿を書きとめる意味でも、常に振り返りながら将来を見ていくという研究が大変必要ではないか、つくづくと思うわけです。

これは一九九八年六月二十七日、愛知大学本館会議室で行なわれた講演内容である。